

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：10107

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K03378

研究課題名(和文) 介護行動の行動分析に基づくユマニチュード評価システムの開発

研究課題名(英文) Evaluation system of humanitude based on behavior analysis of caring behavior

研究代表者

高橋 雅治 (Takahashi, Masaharu)

旭川医科大学・医学部・教授

研究者番号：80183060

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：ユマニチュードを構成する見る、話しかける、触る、立たせるという4つの手法の効果を検討した過去研究が分析された。その結果、これら4つの技法が介護者と被介護者に及ぼす効果を検討した量的研究はほとんどないこと、および、介護者と被介護者の行動はオペラント行動として記述することが可能であることが示された。したがって、ユマニチュードの介護者と被介護者の行動をオペラント行動として記述し、それらの相互作用を記述するモデルを構築する必要があることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、見る、話しかける、触れる、立たせるという4つのユマニチュード技術の効果が定量的に解明される。それにより、今後の介護者教育がエビデンスに基づいてより効率化され、介護技術全般の質の向上がもたらされることが期待される。

研究成果の概要(英文)：The present study analyzed previous studies investigating effects of 4 techniques consisting humanitude, i.e. looking, talking, touching, and raising. The results showed that there has been little quantitative research investigating effects of these 4 techniques on caregivers and care recipients and behaviors of caregivers and care recipients can be described as operant behaviors. Therefore, it was suggested that it is needed to describe behaviors of humanitude caregivers and care recipients as operant behavior and construct a model describing interactions of these operant behaviors.

研究分野：心理学

キーワード：ユマニチュード 行動分析 オペラント

1. 研究開始当初の背景

(1) 今日、認知症の患者に対する全人的なケアの必要性が指摘されている(菊池ら、2014)。実際、対症療法的なケアはしばしば拒否的な行動や暴力的な行動(Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia: BPSD)につながる事が報告されている(Honda et al., 2016)。このような BPSD は介護者の怒り、嫌悪、困難、あきらめを増幅させ、介護者の離職を増加させる事が指摘されている(北村、2005)。したがって、患者と良好な関係を作るケアの手法を確立することが急務である。

(2) この問題を解決するために、これまでバリデーション、パーソンセンタードケア、ユマニチュードなどの介護手法が提案されてきたこれらの中で、前者の 2 つの手法については、その効果を評価する手法が確立されており、多くのエビデンス研究がある(中谷ら、2016 の評論を参照)。だが、ユマニチュードの評価研究は最近ようやく着手され始めており、定量的なエビデンス研究は少ない(中谷ら、2016)。したがって、ユマニチュードの効果を定量的に検討する手法の開発が急務である。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、認知症ケアにおけるユマニチュードの有効性を評価する手法を開発することである。ユマニチュードの評価研究が遅れている理由としては、ユマニチュードを構成する技法の記述が不十分であること、および、介護の現場で、特定の技法の効果のみを検討する実験研究の設定が困難であること等が考えられる。

(2) そこで、本研究では、行動分析の手法を応用することで、ユマニチュード技法の記述モデルを構築し、それに基づいてユマニチュードの効果を評価する手法の開発を目指す。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、まず、ユマニチュードの効果を検討した過去研究を分析することにより、ユマニチュードの諸技法の効果を評価する評価軸の妥当性を検討する。

(2) これと並行して、ユマニチュードを構成する見る、話しかける、触れる、立たせるという 4 つの技法をオペラント行動として記述することを目指す。

(3) さらに、介護者のオペラント行動、被介護者のオペラント行動、および、それら 2 つの行動の相互作用を記述するモデルの開発を行う。それにより、ユマニチュードが介護者と被介護者に及ぼす効果を定量的に評価するシステムを開発する。

4. 研究成果

(1) ユマニチュードの効果を検討した先行研究を系統的に分析した。その結果、これまでの研究の多くは事例研究や質的研究であり、定量的に分析した研究は少ないことが示された。また、これまでに提案されたユマニチュードの評価軸の妥当性もまた検討する必要があることが示唆された。具体的には、図 1 に示したように、ユマニチュードを構成する 4 つのメソッドを医学研究における独立変数として捉えた場合、4 つのメソッドはそれぞれが別個の独立変数であるだけでなく、それらの中のいくつかが組み合わせられることにより、「介護者と被介護者間のコミュニケーション」や「介護者の優しさの行動表現」を実現するためのメソッドとなっている可能性がある。また、ユマニチュードの採用により変化すると思われる結果変数としては、介護者の共感性や遣り甲斐の向上や介護ストレスの軽減等の介護者側の結果変数のみならず、被介護者の BPSD やストレスの低減などの被介護者側の結果変数も存在し、それらは同時に測定される必要があることが示された。

独立変数と従属変数(結果変数)の複雑性

独立変数・見る、話す、触れる、立たせる等の基本的要因

- ・複数の変数がより高次の変数として機能する可能性
(コミュニケーション、優しさの行動表現等)

従属変数・介護者の心理行動的要因

- (共感性、やりがい、ストレス等)
- ・被介護者の心理行動的要因
(行動心理症状、ストレス、薬の処方量等)
- ・より高次の社会的変数
(医療費の削減等)

図 1 ユマニチュードを独立変数とした医学研究における独立変数と結果変数の複雑性

(2)ユマニチュードの構造分析から、介護者の行動と被介護者の行動をオペラント行動として記述することは可能であることが示された。具体的には、被介護者の行動が介護者にとっての弁別刺激となり、それに基づいて介護者が介護行動というオペラント行動を自発し、その結果被介護者の行動が変化することが報酬となる過程が記述される。これと並行して、介護者の行動が被介護者にとっての弁別刺激となり、被介護者がオペラント行動を自発し、それに対して介護者が何らかの報酬となるような刺激を与えるという過程もまた記述することが可能である。したがって、図2のような介護者側と被介護者側の結果変数を同時に評価するための評価票を使用することにより、介護者と被介護者の相互作用の効果を同時に検討することが可能になる。

場面	介護者が自発したメソッド	患者の応答	患者との意思疎通	患者の満足度	介護者の満足度
食事	見つめる	-2: かなり悪い	-2: かなり悪い	-2: かなり悪い	-2: かなり悪い
入浴	話しかける	-1: 悪い	-1: 悪い	-1: 悪い	-1: 悪い
運動	触れる	0: どちらとも言えない	0: どちらとも言えない	0: どちらとも言えない	0: どちらとも言えない
その他()	立たせる	1: 良い	1: 良い	1: 良い	1: 良い
	その他()	2: かなり良い	2: かなり良い	2: かなり良い	2: かなり良い

図2 ユマニチュード評価票の例。介護者は、ユマニチュードの手法を行った場面、介護者が自発したメソッド、メソッドに対する患者の応答、その場面における患者との意思疎通の状態、介護中の患者の精神衛生、および、介護者の精神衛生について5段階で評定する。介護者の視点では、患者の行動が弁別刺激となり、用いたメソッドがオペラント反応、その結果得られた満足度が報酬となる。一方、患者の視点では、介護者の用いたメソッドが弁別刺激、それに対する応答がオペラント反応、その結果得られた満足度が報酬となる。これら2つの過程を監護者が同時に評価するにより、毎回起こる介護者と被介護者の相互作用を記述することが可能となる。

(3)今後は典型的な介護における介護者と被介護者の行動の相互作用を記述する行動モデルを構築する必要があること、および、そのようなモデルを基盤として開発された評価票を用いた定量的な評価研究を行う必要があることが示唆された。具体的には、介護者の行動と被介護者の行動が動的に相互作用する過程を記述するモデルに基づいて、個別の介護過程を分析する応用行動分析の手法を用いる研究が有用であると思われる。

< 引用文献 >

- 内田陽子. (2007). 北関東医学, 57(3), 231-238.
 菊池 卓也他(2014). The 28th Annual Conference of the Japanese Society for Artificial Intelligence, 2014
 Honda, M. et al. (2016). Case reports in medicine, 2016.
 北村育子. (2005). 社会福祉学, 45(3), 53-63.
 中谷こずえ他. (2016). 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要, (17), 73-79.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋雅治、大島 寿美子、本田 美和子、布井 雅人、中澤 篤志
2. 発表標題 ユマニチュード研究の現在と未来
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 池上 将永、高橋 雅治
2. 発表標題 音読・歌唱およびハミング課題遂行中の前頭前皮質活動 -近赤外分光法(NIRS)を用いた検討-
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	池上 将永 (Ikegami Masanaga) (20322919)	旭川医科大学・医学部・准教授 (10107)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------